

地域社会に向かってホスピスの理念を訴え、それを誠実に実行することが病院の個性なのです

長浜 康平

函館おしま病院事務長

昨年四月ホスピス病棟を開設した函館おしま病院の出発点は、昭和五年函館市宝来町に誕生した渡島病院。昭和十九年函館ドックへ譲渡され、函館ドック外科病院となったが、昭和三十年代には渡島外科病院、渡島病院と二回、病院名が改称される。昭和六〇年に現在地の場町に移転、平成十年には病院を改装して医療療養病棟二十六床、介護療養型病棟三十六床の療養型病院となった。

病院が大きく変革したのは平成十四年。福徳雅章氏が理事長・院長に就任し、同時に函館おしま病

院と改称されてからホスピス理念を前面に掲げ、平成十五年十二月日本医療機能評価機構認定病院となり、平成十六年四月には医療療養病棟二十六床をホスピス病棟（緩和ケア病棟）二〇床へ転換、道内でも数少ないホスピス病棟が開設された。

ソーシヤルワーカーと労働組合執行委員長の経験を活かす

長浜康平さんは函館東高校から日本福祉大学の社会福祉学部に進学。卒業後は精神医学ソーシヤルワーカーやリハビリ担当のソーシヤルワーカーを三年間経験し、昭和五〇年函館協会病院に勤務する。以来、ソーシヤルワーカー歴は二



十五年間にも及び、その間には日本医療社会事業協会の副会長として、全国組織の運営の難しさも体験してきた。

「ソーシヤルワーカーと事務長は実務的には違いますが、基本的な物の考え方や患者様によりサービスを提供するという点では違いはありません」。しかし、患者が病院に何かを求めてくるときには「ソーシヤルワーカーの方が感性が磨かれる」と長浜さんは話す。理由は「ソーシヤルワーカーは聞き役に徹するから」。その聞き役の経験を活かすべく平成九年の春、事務長に就任した。

長浜さんにとっては、ソーシヤルワーカーと並び労働組合の執行委員長の経験（昭和五十三年から平成八年まで）も大きな力となった。「労働組合は単なる反対勢力ではなく、政策立案能力が必要な時代になっていました。そのため経営に対する関心が必然的に高くなりましたね」。

当時は経営危機にも直面するなど、労使関係が大きな緊張を強いられる局面が続いたが、ここでも長浜さんは聞き役に徹した。そして良好な労使関係を築き上げ、病院経営の健全化にも力を尽くしてきた。

函館おしま病院の事務長に転身したのは平成十四年の四月。「函館協会病院とは組織の規模や経営の状況、地域医療の役割など環境は違うが、本質的なものは何も変わらない」と思ったそうだ。

「事務長に求められているものは基本的には何も変わりませんが、手法はどんどん進化しています。患者さんのニーズだって変わります」。時代の状況や流れに関心がなければ、事務長の資格はないのだという。

「医療・福祉の流れをよく見極め、それに基づいて病院のかじ取りの提案するのが事務長の役割です。かじ取りの提案とは指針づくりですが、これが一番大事です」。

それと組織の内部における調整役、院内外の苦情処理係でもあります。顧客（患者）満足も職員満足があつて初めて実現できることです。から、職員の生活を守ること当然です。この三点に気をつけることが事務長の役割ではないでしょうか」。

## 病院機能評価の認定を受け、念願のホスピス病棟を開設

函館おしま病院が目標としたホスピス病棟の開設であつたが、開設の前提条件として立ちはだかつたのが病院機能評価。

病院機能評価のことを知らない職員も多く、そこからのスタートだつた。「（病院機能評価の）審査項目に照らし合わせたととき、組織の中のさまざまな問題が浮き彫りになりました」。

最初は多くの項目が合格点を下回っていた。「でも、準備期間中に内部の質が変わってきました。幹部職員はリーダーシップを自覚し、職員は意識の変化が現れるようになった」ことが、病院機能評価を受審した「最大のメリットだつた」と長浜さんは当時を振り返る。認定を受けたのは平成十五年の十二月。通知が届いた日は、院

内が喜ぶ声で満ちあふれた。

「当院はこれまでと同じく地域社会に向かつてホスピスの理念を訴えて、それを誠実に実行します。それが病院の個性なのです」

函館おしま病院は、ホスピス理念はホスピス病棟だけのものではなく、院内全てが（外来も含めて）ホスピス理念を実践する病院作りを目指している。

「そのためには職員の質的レベルをどう向上させるかが課題」であると長浜さんはいふ。向上策の一つとして、発表する場も含めた各種研修機会への参加と、そこで全国の優れた事例を学び他の職員に還元することを以前より継続中だ。

「地域の役割を自覚した病院が、地域から利用されるはず。地域のニーズに応えられる病院を目指します。単に事業規模だけを拡大することは質の低下に結びつくことになるのではと危惧しています。きちんとした質を確保することが何より大事で、そうしなければ必然的に規模は拡大するはず。この病院が地域でどんな役割を求められているのかという原点に立ち返り、質の向上に努力を続けるしかありません」